



ウサギとカメ

イソップのカメとウサギの競争の話では、ウサギが安心して昼寝をしている間に、カメが黙々と進み、ついに栄冠をかちうることになっている。

この教訓は受験戦争の中にある学生にとっては大きな励ましになろう。途中で休んでくれるウサギがいるかどうかは別にして、少なくとも、本来なまけものの人間のことだから、そういうことは当然あると、思わせ、したがって努力をすればカメのようなものでも、追いつき、追い越さうる可能性をもっているということ、暗闇に希望の灯をともしやることができるといえる。

しかし、日本では、農業と工業については、どうにもそれがあてはまりそうにもない。ウサギである工業は、在庫過剰で一服状態にはいつているといっても、それでも成長率は10%台に達するほどである。農業というカメは、ウサギからなんとかして離れまいとするけれども、どうにも果たせないというのが実態である。

44年度の農家総所得（農業所得＋農外所得＋被贈扶助収入）は140万円で、勤労者世帯の全国平均に比べると94.7%だが、人口5万人未満の市町村の勤労者世帯の平均に比べると103.2%で、それより高くなっている。

しかし農家の中のエリートともいべき自立経営農家、つまり、町村在住の勤労者を比較の対象にとり、世帯員1人当たり所得でそれと均等以上の農業所得をあげている農家についてみると、なにしろ町村在住の勤労者の所得がぐんぐん上がっていくものだから、自立経営の座を維持することはまことに容易ではない。

43年度の下限の農業所得は118万円であったが、44年度はそれが132万円となり、一年に14万円も上がっている。その前年の前々年に対する場合も15万円であった。

したがってこれを稲作だけで補っていかうとすると、毎年30アール、つまり三反ずつふやしていかなければ、自立経営の座からは自然におりてい

かねばならない。

今後とてもこの傾向に変わりはあるまい。ウサギはややくたびれてきたといっても、それでもまだたいへんなスピードで走っているからである。また兼業農家にしても、農外所得の方は賃金の平準化によって、最近ほどの産業、企業も世間並みの賃金を出さねばやっていけなくなっているから問題はない。しかし、兼業農家とて農業所得の方は、価格が上がらない限り、なにほどこ面積ないし生産量をふやす以外にない。

自立経営の稲作農家が、毎年30アールずつ水田を購入していくとすると、それだけで毎年百万円以上の資金を寝かせていかねばならない。おそらくそれは不可能といっている。なにしろ毎年の農家の経済余剰は、20万円程度にすぎないからである。

兼業農家にしても、かといって、農業所得をふやすために積極的な投資をするかという、まずその余裕は少ない。あつたとしても、多数の兼業農家はその方向に向かって行動したら、農産物が過剰になることは疑いない。

となると、兼業農家はますます兼業に傾斜し、自立経営農家ないし専業農家は年一年、兼業への誘惑に足をとられていき、ついにオール兼業化の状況にならざるをえない。一流の工業と三流、四流の農業をもつ日本の悲劇である。

しかし、それで放っておいていいものであろうか。水田は全部雑草の生えるにまかせ、米は全部、なにがなんでもアメリカから買っているということですむであらうか。それは結局、石油の悲劇でしかない。いいようにもて遊ばれるだけである。

土地を離さないなら、それを貸してくれという農家が出てきて、借地農業で大規模に農業をやることを考えなければ、日本の稲作は「水田あって水稲亡ぶ」ということになってしまうであらう。

西ドイツでは自立経営農家の育成策を根本的に改め、むしろ最近では兼業農家の生産の組織化に力を入れている。

工業化が高度になった社会の農業を、意識して考える必要が出てきている。